

八尾市亀井・渋川所在

# 久宝寺遺跡・竜華地区

## 試掘調査報告書

1996年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

# 序 文

久宝寺遺跡は、大和川が形成した河内平野の中央部に位置する低湿地遺跡である。久宝寺遺跡の発見は、昭和10年の道路工事の際に弥生～古墳時代の土器や剣船の残片が出土した事による。その後、遺跡周辺では長らく発掘調査の機会がなく、遺跡の実態については不詳のままであった。久宝寺遺跡の持つ豊かな歴史性の一端が白日の下に晒されたのは、1973年度に当センターにより実施された近畿自動車道天理吹田線建設に先立つ試掘調査によってである。全長1.5kmにも及ぶ区間で、弥生時代から古墳時代を中心とする大量の遺構・遺物が検出され、並々ならぬ遺跡との印象を強く持たせるものであった。

しかしながら、同じく当センターの手で1980年度より1985年度まで実施された本調査では、そうした印象を遙かに凌駕する縄文時代から現代に至る各時代の膨大な遺構・遺物が検出されている。その中には画期的な新知見も多く含まれており、遺跡の巨大さのみならず、内容の豊富さにおいても特筆すべきものであった。とりわけ、保存状態のよい古墳時代前期の準構造船がその組合せ材とともに出土したのは驚きであった。船本体そのものは先端より3mほどで当時既に切断されていたが、船形埴輪では存在が知られていた斜め前面に突き出す船首材の実物の出土は本邦初であり、船材の組合せ方法が具体的に判明した点でも貴重な発見であった。

また、古墳時代中期の旧大和川水系の本流に施工された大規模な堰や護岸は、從来はない複雑な構造を持つものであり、周辺での韓式系土器の出土からしても、渡来人の新技術を導入した河内平野開発の新たな展開を窺わせるものであった。

今回、当センターでは、10年振りに久宝寺遺跡内の旧国鉄竜華操車場跡地の再開発に先立つ試掘調査を実施する事になった。今回の調査は、別途報告する駅舎部の2ヵ所のトレンチを同時並行に調査しているとはいえ、20万m<sup>2</sup>にも及ぶ操車場跡地に5×5mの小試掘孔を7ヵ所穿つだけのものである。これでは広大で複雑な内容を有する久宝寺遺跡の実態を予見するにはいささか心許ないが、調査結果からはダイナミックな久宝寺遺跡の一端を垣間見る事はできたようである。この後も、竜華地区内の調査が予定されているようであるが、久宝寺遺跡の持つ豊かな歴史性が益々明らかとなっていく訳であり、楽しみな事ではある。

これも、ひとえに大阪府教育委員会、国鉄精算事業団を始めとする関係各位の御指導・御協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへの御支援を賜るよう切に希望する。

平成8年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター  
理事長 塚 井 清 足

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市龜井および渋川所在の久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査（95-1・2・3・4・5・6・7トレンチ）の報告である。
2. 久宝寺遺跡・竜華地区95-1～7トレンチの試掘調査は、国鉄清算事業団の委託により、(財)大阪府文化財調査研究センターが1995（平成7）年度行った。
3. 試掘調査は、(財)大阪府文化財調査研究センター中部調査事務所長赤木克視および同所調査第1係長岩崎二郎の指示の下、技師本間元樹が担当した。
4. 試掘および整理作業には、(財)大阪府文化財調査研究センター職員片山彰一（写真）・畠暢子（整理作業）・山口誠治（保存・自然科学）・三好孝一（整理作業）・後藤信義（現地調査）・本田奈都子（現地調査）、調査員笠井勉、調査補助員奥座普・金子英児・佐伯春子・西川由美子・平田淑子らの協力を得た。
5. 本書の執筆は、III章を山口が、その他の章を本間が担当した。編集は本間が行った。

## 凡　　例

1. 本書中のレベルはすべてT.P.（東京湾平均海面）である。
2. 方位は国土地標第VI座標系の座標北を示す。調査時点では座標北は、磁北より東へ6°26'、真北より西へ0°14'振られている。
3. 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』1995年版を用いる。
4. 土器類の断面は、縦文土器・弥生土器・土師器は白抜き、須恵器・磁器は黒塗りで表示する。
5. 実測図の縮尺は、各トレンチ平面は1/100、断面は縦1/80 横1/120、土器類は1/3とする。

## 目　　次

I	調査の方法	3
II	調査の成果	5
III	土壤分析の予察	12

図1	久宝寺遺跡・竜華地区の位置	13	図19	95-3トレンチ第3面	17
図2	トレンチ配置	13	図20	95-3トレンチ第4面	17
図3	95-1トレンチ北壁断面	14	図21	95-3トレンチ第7面	17
図4	95-2トレンチ北壁断面	14	図22	95-4トレンチ第2面	17
図5	95-3トレンチ北壁断面	14	図23	95-4トレンチ第8面	18
図6	95-4トレンチ北壁断面	14	図24	95-5トレンチ第2面	18
図7	95-5トレンチ北壁断面	15	図25	95-6トレンチ第2面	18
図8	95-5トレンチ東壁断面	15	図26	95-6トレンチ第3面	18
図9	95-6トレンチ北壁断面	15	図27	95-6トレンチ第6面	18
図10	95-7トレンチ北壁断面	15	図28	95-7トレンチ第3面	18
図11	95-1トレンチ第5面	16	図29	95-1トレンチ出土遺物	19
図12	95-1トレンチ第6面	16	図30	95-2トレンチ出土遺物	19
図13	95-1トレンチ第7面	16	図31	95-3トレンチ出土遺物	20
図14	95-1トレンチ第9面	16	図32	95-4トレンチ出土遺物	20
図15	95-2トレンチ第3面	16	図33	95-5トレンチ出土遺物	20
図16	95-2トレンチ第4面	16	図34	95-6トレンチ出土遺物	21
図17	95-2トレンチ第7面	17	図35	95-7トレンチ出土遺物	21
図18	95-2トレンチ第9面	17			
写真1	久宝寺遺跡・竜華地区全景	22	写真13	95-3トレンチ第7面	23
写真2	久宝寺遺跡・竜華地区	22	写真14	95-3トレンチ第7面偶蹄類足跡	23
写真3	95-1トレンチ第5面	22	写真15	95-4トレンチ第2面	23
写真4	95-1トレンチ第6面	22	写真16	95-4トレンチ第2面井戸1	23
写真5	95-1トレンチ第7面	22	写真17	95-4トレンチ第8面	24
写真6	95-2トレンチ第3面	22	写真18	95-5トレンチ第2面	24
写真7	95-2トレンチ第4面	22	写真19	95-6トレンチ東壁断面の噴砂	24
写真8	95-2トレンチ第7面	22	写真20	95-6トレンチ第2面	24
写真9	95-2トレンチ第8面	23	写真21	95-6トレンチ第3面	24
写真10	95-2トレンチ第9面	23	写真22	95-6トレンチ第6面	24
写真11	95-3トレンチ第3面	23	写真23	95-7トレンチ第2面	24
写真12	95-3トレンチ第4面	23	写真24	95-7トレンチ第2層土器出土状況	24

# I 調査の方法

**調査にいたる経緯** 久宝寺遺跡は、大阪府八尾市西久宝寺を中心に北東—南西に約1500m、北西—南東に約550mの範囲に広がる。そのうち今回試掘調査を実施した久宝寺遺跡・竜華地区〔図1・2〕は、1938(昭和13)年から1986(昭和61)年まで国鉄の竜華操車場であった。平面紡錘形の操車場跡地はJR関西本線(大和路線)の上下線に挟まれており、北側に久宝寺駅奈良方面行きホームが、南側に同駅天王寺方面行きホームがある。この広大な操車場跡地を活用するために線路を一方に集約する必要があるが、操車場跡地の大部分は久宝寺遺跡、東側の一部は跡部遺跡として周知されている。そのため、国鉄清算事業団近畿支社大阪事務所の依頼を受け、(財)大阪府文化財調査研究センターが操車場跡地北側の新線路予定地に沿って試掘調査を実施することになった。

**トレンチの位置** トレンチの呼称は、たとえば「久宝寺遺跡・竜華地区95-1 トレンチ」の場合、遺跡名の後の数字〔95-1〕は、(財)大阪府文化財調査研究センターが1995(平成7)年度に調査したトレンチのうち1番目ということを示す。今回の試掘調査では、JR関西本線久宝寺駅周辺で奈良方面行き線路の南側に沿って7か所のトレンチが設定されたので、西の天王寺側より東の奈良側に向けて順に95-1～95-7 トレンチと呼称する。各トレンチの大きさは5.2×5.2mで、調査対象深度は6.0mである。現行の行政区画では、95-1～4 トレンチは八尾市亀井、95-5～7 トレンチは八尾市渋川にある。なお、これと併行して、久宝寺駅奈良方面行きホームの南側に新駅舎建設のため95-8・9 の2つのトレンチで発掘調査が行われたが、報告は別途なされる。

**調査体制** 1995(平成7)年度、(財)大阪府文化財調査研究センターは久宝寺遺跡・竜華地区的9か所のトレンチで調査を行った。調査担当者は試掘部(95-1～7 トレンチ)に1名、駅舎部(95-8・9 トレンチ)に2名で、発掘調査の進行や記録を分担した。調査請負業者はひとつで数名の調査補助員も両調査区の諸作業に従事した。試掘部では、7つあるトレンチを調査期間前半の4つ(95-1～4 トレンチ)と後半の3つ(95-5～7 トレンチ)に分け、通常、作業員4～8名(平均6名)と調査担当者1名が、遺構面と断面の検討や記録1か所、掘削2～3か所に分散して作業を進めた。

**調査日程** JRの線路際に設定された深さ6.0mのトレンチのために、発掘調査に先立って国鉄清算事業団の手で、トレンチ位置に鋼矢板が打設された。その後、1995(平成7)年5月24日発掘調査の準備工に着手し、トレンチの機械掘削を6月19日開始した。人力による調査は6月20日から、途中中断期間や休日をはさんで、12月20日までの実働73日間であった。作業日は重複するが各トレンチの調査には延べ14～39日間を費やした。

**地区割り** 國土座標第VI系を使用する。この座標系の原点は東経136° 00' 北緯36° 00' の福井県越前岬付近である。したがって当遺跡周辺の場合、X座標は原点より南へのkm数、Y座標は西へのkm数で表示される。

**方位** 地区割りと同様に第VI系の座標北を採用した。調査時点でトレンチの座標北は、磁北より東へ6° 26'、真北より西へ0° 14' 振れていた。

**高さ** 東京湾平均海面(T.P.)を適用した。なお、T.P.と大阪湾平均海面(O.P.)とは、T.P.±0.0m=O.P.+1.3mの関係にある。

**面と層の呼称法** 機械掘削を終了し人力による調査の開始される面(=機械掘削終了面)を第1面と呼び、以下、上から順に調査面番号を付す。

各トレンチ間の距離は、とくに離れている95-4 トレンチと95-5 トレンチの間で505m、その他トレンチ間でも105ないし165mあり、最北西側の95-1 トレンチと最南東側の95-7 トレンチでは1225m離れている。そのため、各トレンチでの構造面の検出状況が異なったので、土層堆積状況や面の遺存状況を勘案しトレンチ毎に遺構面番号を付した。したがって、同一呼称の面（たとえば同じく第2面と呼んでも）であっても調査区が異なれば時期や性格の異なる面を指すことになった。

層名は第X面から次の面までを第X層とする。すなわち、同じ数字の「面→層」の順となる。ここでいう「層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、面と次の面との間の堆積は土層観察の結果分層されることがある。細分された各層は、断面図〔図3~10〕に示すように○付数字で表す。

遺構番号 トレンチ毎、遺構の種類毎、検出順に遺構番号を付した。今回検出した遺構の種類には、ピット、溝、井戸、土坑がある。

遺物の取り上げ 遺物は日ごと、遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごとに取り上げた。その取り上げ単位ごとに遺物登録番号を与えた。

図面作成 各面の平面図は、平板測量または写真測量により作成した。土層断面は、各トレンチの北辺（JR線路寄り）と東辺について記録した。いずれも縮尺は1/20に統一した。

調査の実際と問題点 発掘調査は、操車場設営に関するバラス層や搬入土を重機により除去することから始めた。その厚さは、トレンチごとの堆積状況により違があるが、1.13~1.64mであった。重機による排土後、鋼矢板が倒れないようH型鋼による支保工を行った。

人力による発掘調査は、狭く深いトレンチということから、作業効率は必ずしも良くはなかった。まず、トレンチの北辺と東辺に奥行き60cm程度の土層観察用アゼを残し、その手前とトレンチの南および西辺に堆積状況確認と排水を目的とした側溝を開いた。その幅は掘削深度や堆積土の状況によって30~60cmの間で適宜定めた。トレンチの面積は計算上5.2×5.2=27.0m<sup>2</sup>であるが、土層観察用アゼと側溝（仮に50cm幅とする）の部分を除くと、平面として調査できる面積は13.0m<sup>2</sup>にしかならない。

各トレンチとも現地表面から2m程度掘り下げる、排水と排土運搬の問題が生じた。各トレンチでは程度の差こそあれ絶え間ない湧水があり、調査時には必ず水中ポンプを回さねばならなかった。ポンプの電源は、公共電力の導入ができなかったため、トレンチごとに発電機を設置して対応せざるを得なかつた。しかし、発電機の燃料補給の関係で、作業休止日はもちろん夜間もよほど必要がなければ水中ポンプを止めなければならない。そのため、毎日の夕方や週末の午後には、作業に追われることとなつた。また、湧水は土層観察用アゼの背面からも流入し、しばしばアゼを崩壊させた。

排土については、長さ7m程度のベルトコンベアでトレンチ外に運搬する予定であったが、その傾斜がきつくなるにつれて困難の度が増し、掘削深度が3m程度に及ぶとまったく用をなさなくなつた。そのため、人力掘削時の排土の大部分は、重機やクレーンでパッカン（容量約1m<sup>3</sup>の鉄製バケツ）をつり下げ行った。JRの営業線路に近接した作業のために、その機械類を操作するためには重機運転手のみならず、さらに誘導員と列車見張り員からなるチームが必要であり、調査トレンチごとにその人員を確保することが困難なため、重機運転手らのチームは複数のトレンチ間を絶えず移動しつつ作業しなければならなかつた。また、トレンチが狭いため作業員2~4人程度のスペースしかなく、そのため道具類の取り扱いには細心の注意を要した。

人力掘削による発掘調査終了後、調査掘削深度の確認、埋め戻し、支保工撤去、写真用足場撤去、鋼矢板引き抜きを行い、現地における作業を完了した。

## II 調査の成果

以下に、95-1～7トレンチの調査成果を掲げる。各トレンチにつき、遺構面とそこで検出された遺構、出土遺物、そして小結として検出遺構と出土遺物総数と推定できる遺構面の時期について、紙幅の関係から簡潔に述べる。なお、面の説明文中に遺構名が記載されていない場合検出遺構のないことを示し、出土遺物の項に見出しがない場合はその面や層からは遺物は出土していないことを表す。また、遺構面の基盤となる土層は本文にて触れるが、その他の層序については各トレンチの断面図〔図3～10〕とその注記を参照されたい。

### 1 95-1トレンチ

#### 95-1トレンチの遺構面

第1面 機械掘削終了面。面の高さはT.P.+6.5～7.0mで、北西側が高く、南東側が低い。

第2面 よく攪拌された暗灰黄色シルト層〔図3-⑤層〕上面。南西部が周囲に比べて約15cm高くなる。調査範囲の大部分は暗灰黄色だが、東側1/3ほどは土がより黒味をおびる。面の高さはT.P.+6.3～6.5m。

第3面 粘性の強い褐灰色シルト層〔図3-⑦層〕上面。ヒトの足跡が約5個、偶蹄類の足跡が約10個みられる。面はほぼ平坦で、その高さはおよそT.P.+6.1m。

第4面 黒色炭化物の混じる暗オリーブ灰色シルト層〔図3-⑨層〕上面。面はほぼ平坦で、およそT.P.+5.9m。

第5面〔図11・写真3〕 第4層〔図3-⑨層〕を除去した灰色細砂層〔図3-⑩層〕上面。旧地表面ではないが、第4面が地表面であった期間に形成された可能性のある深さ約20cmの溝状やピット状の落ち込みがみられる。面の高さはT.P.+5.4～5.5m。

第6面〔図12・写真4〕 粘性が強く炭化物の混じる暗灰色シルト層〔図3-⑫層〕上面。トレンチ内に方位も間隔もびったり収まるような、一辺2.3mの正方形の四隅の位置にピット1～4を検出。あまりの偶然にピットの存在自体を疑った。しかし、上層の第4面や第5面ではこれらのピットは検出されず、また、断面観察で各ピット周囲の第6層中にみられる複数の植物遺体層が下方に褶曲していることが確認できたため、この面に掘り込まれたピットであると判断した。ピット1の掘り込み面はT.P.+5.00mで、直径15cm、深さ10cm。ピット2の掘り込み面はT.P.+5.01mで、直径14cm、深さ23cm。ピット3の掘り込み面はT.P.+5.02mで、直径13cm、深さ14cm。ピット4の掘り込み面はT.P.+5.04mで、直径15cm、深さ14cm。ピット2は底部が北西に偏するが、他のピットは垂直に掘り込まれている。埋土はいずれも第5層の下部〔図3-⑪層〕と同じ。これらピット群が1軒×1軒の掘立柱建物を構成するのか、さらにトレンチ外に展開するのかは不明。その他の遺構はない。各ピットの掘り込みレベルに示されるように、面はほぼ平坦である。

第7面〔図13・写真5〕 植物遺体の集積したオリーブ黑色シルト層〔図3-⑯層〕上面。南東-北西にはしる溝1を検出。溝は断面碗形で、深さは3～9cm。面の高さはおよそT.P.+4.2mだが、東側が数cm程度高い。

第8面 オリーブ黑色シルト層〔図3-⑯層〕上面。面はほぼ平坦で、およそT.P.+3.8m。

第9面〔図14〕 第8層の洪水砂層〔図3-⑰層〕を除去した黒味の強い暗オリーブ灰色シルト層

〔図3-②層〕上面。明確な遺構はないが、トレンチ中央部の南東から北西にかけておよそT.P.+2.7mの微高地がみられ、北東側と南西側が5~10cm低くなる。全面に偶蹄類の足跡が無数にある。

#### 95-1 トレンチの出土遺物

第1面 弥生土器の高杯脚部1点（混入と考えられる）。

第1層 染付10片、陶器30片、瓦器1片、瓦3片。

第2層 陶器1片、瓦器1片。

第1~4層 側溝掘削中に出土した遺物で、層位確定できず。陶器のすり鉢1片、土師器3片、土器または弥生土器34片（弥生時代後期が多いが、庄内式の複合口縁の壺〔図29-1〕もある）。

第3層 染付2片、陶器2片（うち灯明皿1点）、土師器または弥生土器331片（細片が多い。時期の判明するものでは弥生後期が約7割を占める）、モモ種1個、石1個。

第4面 古式土師器または弥生土器79片（細片が多いが、弥生後期が約8割を占める）。

第4層 古式土師器または弥生土器〔図29-2~16〕686片（タキの施されたものあるいは器壁の薄い壺部の破片がとくに多い。うち庄内式〔図29-4~7・14〕55片以上、弥生時代後期の土器〔図29-8〕88片以上。吉備系の壺〔図29-9〕もみられる）。

第4・5層 断面観察用アゼから弥生土器14片。

第5層 弥生土器4片。

第6面ピット2 土師器または弥生土器3片（うち1片は庄内式か）。

第6面ピット4 弥生時代後期の土器1片。

第6層 弥生土器5片、木1片。

第7面 弥生時代中期後半の壺〔図29-17〕1個体。

第7層 節の輪のみられる桿（主茎）の化石植物1点。

第8層 節の輪のみられる桿（主茎）の化石植物1点。

層位不明 弥生土器1点。

#### 95-1 トレンチの小結

検出遺構は、第6面でピット1~4、第7面で溝1。他に遺構とはしなかったが、第5面で落ち込みを、第9面で微高地状に高まる部分と溝状に低くなる部分とを検出した。その他の面は、第1面を除きほぼ平坦である。出土遺物総数1219点。以上の遺構と遺物から、第1面は近代、第2面は近世以降、第4~6面は弥生時代後期~古墳時代前期、第7面は弥生時代中期と推定される。

## 2 95-2 トレンチ

#### 95-2 トレンチの遺構面

第1面 機械掘削終了面。よく擾拌された旧耕土と考えられる暗オリーブ灰色シルト層〔図4-①層〕上面。面の高さはT.P.+6.6~6.8m。

第2面 暗灰黄色シルト層〔図4-②層〕上面。面はほぼ平坦で、T.P.+6.4~6.5m。

第3面〔図15・写真6〕 暗黄褐色シルト層〔図4-③層〕上面。南北方向の溝を2条検出。溝1は最大幅80cm、深さ3~8cm、埋土は10YR4/3にぶい黄褐色シルト。溝2は幅25cm、深さ5cm、埋土は10YR4/2灰褐色シルト。面の高さはおよそT.P.+6.2m。

第4面〔図16・写真7〕 粘性の強い黄灰色シルト層〔図4-④層〕上面。東西方向の溝6条（溝3

～8）と南北方向の溝2条（溝9・10）の計8条を検出。いずれも断面直形で、深さ5cmと浅く、幅は狭い溝6で20～25cm、広い溝4では60cm。面の高さはT.P.+5.9～6.0m。

第5面 薄い植物遺体層が集積するオリーブ黒色シルト層〔図4-⑥層〕上面。面はほぼ平坦で、およそT.P.+5.8m。

第6面 暗オリーブ灰色シルト層〔図4-⑥層〕上面。北西部がT.P.+5.7m、南東部がT.P.+5.6mとトレンチ南東側が低くなり、それにつれて土の黒味がより強くなる。

第7面〔図17・写真8〕 木の枝などの植物遺体を含むオリーブ黒色シルト層〔図4-⑦層〕上面。トレント南側が上層の洪れ砂〔図4-⑪層〕により溝状に落ち込む。北側の高台部分がT.P.+4.6～4.8m、南側の低い部分ではT.P.+4.3～4.5m、と約30cmの比高があり、高低両部分とも東側が高く西側が低い。

第8面〔写真9〕 オリーブ黒色シルト層〔図4-⑩・⑪層〕上面。トレント東半部はT.P.+4.2～4.3mで、西半部はおよそT.P.+4.1mとやや低くなる。

第9面〔図18・写真10〕 土壌化が著しい黒色シルト層〔図4-⑫層〕上面。第8面と同様に、トレント東側2/3がやや高く、西側が15cmほど低くなる。面の高さはT.P.+3.8～4.0m。なお、遺構面として記録はしなかったが、第9層中の灰色細砂層〔図4-⑬層〕および灰色シルト層〔図4-⑭層〕上面でも層理面の検出を行い、遺構のないことを確認している。

第10面 植物遺体層が多数集積したオリーブ黒色シルト層〔図4-⑯層〕上面。面の高さはT.P.+3.4～3.5mで、東側がわずかに高い。

第11面 黒味の強いオリーブ黒色シルト層〔図4-⑯層〕上面。面の高さはT.P.+3.2～3.3mで、第10面同様東側がわずかに高い。

第12面 オリーブ黒色シルト層〔図4-⑯層〕上面。遺構はないが、上層の砂〔図4-⑯層〕にパックされた偶蹄類の足跡が多くみられる。面の高さはT.P.+2.9m。

第13面 第12面の土壤とよく似たオリーブ黒色シルト層〔図4-⑯層〕上面。面はほぼ平坦で、およそT.P.+2.8m。

## 95-2 トレントの出土遺物

第1層 白磁1片、陶器5片、土師器6片、須恵器1片。

第2層 染付1片、陶器5片、土師器2片、須恵器1片。

第1～5層 断面観察用アゼから陶器7片と泥メンコ1点。

第3層 染付1片、陶器2片、石1個。

第4層 弥生土器？2片。

第5層 土師器杯〔図30-1〕1点、弥生土器〔図30-2・3〕11片。

第6層 弥生土器〔図30-4・5〕26片（後期が主）。

第7層以下 出土遺物なし。

## 95-2 トレントの小結

検出構造は、第3面で溝1・2。第4面で溝3・10。他に第7面の南半部で溝状の落ちを検出。第8面～第11面は地形的に東側が高くなる。その他の面はほぼ平坦。出土遺物総数74点。以上の遺構と遺物から、第1面は近代、第2・3面は近世以降、第5・6面は弥生時代後期と推定される。

### 3 95-3 トレンチ

#### 95-3 トレンチの遺構面

第1面 機械掘削終了面。旧耕土と考えられる暗灰色シルト層〔図5-①層〕上面。面はほぼ平坦で、T.P.+6.8~6.9m。

第2面 旧耕土のベースである暗緑灰色細砂混じりシルト層〔図5-②層〕を除去した黄褐色シルト層〔図5-④層〕上面。トレンチ南東隅に近世以降の木組みの井戸1が存在したが、鋼矢板と側溝により原形が著しく損なわれた。面の高さはT.P.+6.3~6.5mで、北西側が高く、南東側が低い。

第3面〔図19・写真11〕 植物遺体層を含む黃灰色細砂混じりシルト層〔図5-⑤層〕上面。畦状に不定方向にのびる10cm程度の高まりを検出。面の高さは、およそT.P.+6.2m。

第4面〔図20・写真12〕 植物遺体層と砂混じりのオリーブ黒色シルト層〔図5-⑥層〕上面。南西-北東方向の、幅1.8m、深さ50cmの溝1を検出。面の高さは、およそT.P.+5.2m。

第5面 オリーブ黒色砂混じりシルト層〔図5-⑩層〕上面。面の高さはT.P.+4.9~5.0m。第5面と第6面は、第4面の溝1によってその部分が攪乱されている。

第6面 粗砂混じりの黒色シルト層〔図5-⑪層〕上面。面の高さはT.P.+4.7~4.9m。

第7面〔図21・写真13〕 よくしまったオリーブ黒色シルト層〔図5-⑭層〕上面。遺構はないが、偶蹄類の足跡〔写真14〕を明瞭に8個検出した。トレンチ西側の高さはおよそT.P.+4.0mで、東側は10数cm低くなる。

第8面 厚さ数mm程度の植物遺体層の集積したオリーブ黒色シルト層〔図5-⑯層〕上面。トレンチ南西側に偶蹄類の足跡が多数みられる。面はほぼ平坦で、およそT.P.+2.8m。

第9面 黒色シルト層〔図5-⑰層〕上面。面はほぼ平坦で、およそT.P.+2.7m。

#### 95-3 トレンチの出土遺物

第1層 染付1片、陶器19片、瓦1片、瓦質土器5片、瓦器2片、土師器6片、弥生土器2片。全体的に細片が多い。

第1・2層 断面観察用アゼから染付1片、陶器2片。

第2面井戸1 染付1片、瓦8点。

第2層 陶器1片、瓦1片、土師器1片。

第2・3層 断面観察用アゼから陶器1片、土師器3片、弥生後期の土器1片。

第3層 陶器1片、瓦4片、土師器または弥生土器182片（細片が多く、土師器と弥生土器との区別は難しい。庄内式〔図31-1・2〕も含まれるが、弥生土器〔図31-4~6〕が主体を占める）、突帯文土器〔図31-7〕1片、木2片。

第4面溝1 弥生土器1片、モモ種1個、カヤの実1個。

第4・5層 断面観察用アゼから弥生土器1片。

第5層 弥生土器5片。

第6層 弥生土器1片。

第7層以下 出土遺物なし。

#### 95-3 トレンチの小結

検出遺構は、第2面で井戸1、第4面で溝1。他に第3面で畦状の高まりを、第7面ではわずかに西が高く東が低い地表面上で、偶蹄類の足跡を明瞭に検出した。その他の面はほぼ平坦である。出土遺物

総数256点。以上の遺構と遺物から、第1面は近代、第2面は近世以降、第3面は弥生時代後期～古墳時代前期、第4～6面は弥生時代と推定される。

#### 4 95-4 トレンチ

##### 95-4 トレンチの遺構面

第1面 機械掘削終了面。旧耕土と考えられる暗灰色シルト層〔図6-①層〕上面。面の高さはT.P.+7.1～7.2m。

第2面〔図22・写真15〕 土壌化の著しい灰色シルト層〔図6-④層〕上面。トレンチ中央部に一辺約2.2m、深さ15～20cmの土坑1検出。トレンチの断面図〔図6〕には、土坑1と同様の掘り込みが複数みられる。それら土坑の埋土は共通して5GY4/1暗オリーブ灰色シルトに④層のブロックが多量に混じっているので、第2面から掘り込まれた後、短時間に埋め戻されたと考えられる。トレンチ南側にみられる井戸1〔写真16〕とした構造物は、その使用された板材の寸法が $100 \times 5 \times 1$ cm、縦木が3.3cm角であることと、方位軸は現在の鉄道線路に沿っていることから、国鉄時代の操車場に関わるなんらかの施設ではないかと推定される。面の高さはT.P.+6.8～6.9m。

第3面 植物遺体層を多く積層した褐灰色シルト〔図6-⑤層〕上面。面はほぼ平坦で、およそT.P.+6.5m。

第4面 黒色砂層〔図6-⑦層〕上面。面の高さはT.P.+6.1～6.3mで、南東側が高く、北西側が低い。

第5面 炭化物が少量混じる暗オリーブ灰色シルト層〔図6-⑩層〕上面。面の高さはおよそT.P.+5.6mだが、北側がわずかに高い。

第6面 第5層の砂層〔図6-⑪層〕を除去した、炭化物の細粒などの混じるオリーブ黒色シルト層〔図6-⑫層〕上面。断面〔図6〕に示されるように面上は凸凹しているが、明瞭に遺構あるいは足跡と認められるものはない。面の高さは、およそT.P.+5.3m。

第7面 黒色シルト層〔図6-⑬層〕上面。面は平坦で、その高さはT.P.+3.5m。

第8面〔図23・写真17〕 オリーブ黒色シルト層〔図6-⑭層〕上面。南北方向の溝1を検出。幅約35cm、深さ5cm、埋土は第7層下部の灰色シルト〔図6-⑮層〕。面はほぼ平坦で、T.P.+3.0m。

##### 95-4 トレンチの出土遺物

第1層 磁器8片（うち青磁1点、染付6片）、陶器15片、瓦4片、瓦質土器1片、土師器4片、須恵器2片。

第2面土坑1 染付2片、陶器8片、須恵器1片。

第2層 陶器4片、土師器皿〔図32-1〕1点、須恵器2片。

第3層 陶器1片、瓦1片、土師器1片。

第4層 弥生後期の甕〔図32-2〕1点。

第5層以下 出土遺物なし。

##### 95-4 トレンチの小結

検出遺構は、第2面で土坑1と井戸？1。第8面で溝1。第4面が南東側から北西側に緩く傾斜し、第6面上に起伏がみられるが、他はほぼ平坦である。出土遺物総数56点。以上の遺構と遺物から、第1面は近代、第2面は近世以降、第3面は中世？、第4面は弥生時代後期以降と推定される。

## 5 95-5 トレンチ

### 95-5 トレンチの遺構面

第1面 機械掘削終了面。よく搅拌された暗灰黄色シルト層〔図7・8-①層〕上面。面の高さはT.P.+8.2~8.4mだが、トレンチ南側は搅乱を受けT.P.+7.7m程度まで低くなっている。

第2面〔図24・写真18〕 オリーブ褐色シルト層〔図7・8-③層〕上面。東南東から西北西に向けて幅30cm程度、深さ数cmのいわゆる素掘り小溝を6条検出した。溝の埋土は、いずれも第1層下部のオリーブ褐色シルト〔図7・8-②層〕である。この周辺では条里地割りが正方位に則っていないために、これらの溝の主軸方位は東西方向から若干ずれている。面はほぼ平坦で、およそT.P.+7.9m。

なお、第2層の大部分は厚さ4m以上にわたって洪水砂〔図7・8-④~⑩層〕が堆積しており、旧地表面として記録する遺構面はなかった。またトレンチ東壁断面〔図8〕では、地震発生時の地表面は明確にできなかったが、④・⑤・⑦層中および⑫層を突き破り上昇する噴砂を観察することができた。

### 95-5 トレンチの出土遺物

第1層 磁器1片、陶器29片、瓦4片、歴史時代の須恵器14片、歴史時代の土師器17片、瓦を転用したメンコ〔図33-1〕1点。

第1・2層 側溝などから磁器1片、陶器7片、瓦1片、須恵器15片（うち歴史時代8片、古墳時代片1）、土師器37片（うち歴史時代27片、古墳時代10片）、弥生時代後期の土器1片。

第2層（上部のシルト層=図7・8-③層・厚さ0.2~0.4m） 陶器2片、黒色土器2片、瓦1片、須恵器〔図33-2〕38片（うち歴史時代2片、古墳時代1片）、土師器53片、弥生時代前期の壺1点。

第2層（下部の砂層・厚さ4.3m以上） 陶器3片、古墳時代の須恵器1片、土師器4片（うち歴史時代1片、古墳時代3片）、土師器または弥生土器〔図33-3・4・6~8〕25片（庄内式〔図33-3・4・6・7〕を含む）、弥生土器493片（うち後期〔図33-5〕40片、中期4片、前期〔図33-9〕13片）、土錐〔図33-10〕1点、縄文時代後期の深鉢〔図33-11〕1片。

### 95-5 トレンチの小結

検出遺構は、第2面で溝1~6。出土遺物総数752点。以上の遺構と遺物から、第1面は近代、第2面は古代～中世と推定される。第2層の洪水砂層には、弥生土器を主体に多くの遺物が含まれる。

## 6 95-6 トレンチ

### 95-6 トレンチの遺構面

第1面 機械掘削終了面。よく搅拌されたにぶい黄褐色シルト層〔図9-①層〕上面。面の高さはT.P.+7.9~8.2mで、北西側が高く、南東側が低い。なお、トレンチ東壁断面では、第1面に達する噴砂〔写真19〕が認められた。

第2面〔図25・写真20〕 暗灰黄色シルト層〔図9-②層〕上面。南南西から北北東にはしる溝を4条検出。溝2が幅50cmと広く、溝1・3・4は幅30cm程度、深さはいずれも数cm。いわゆる素掘り小溝である。溝の埋土は、いずれも第1層〔図9-①層〕の土。これらの溝の主軸方位も東西方向からずれている。95-5 トレンチ第2面〔図24〕と同じくおよそT.P.+7.9mの面で、溝群は互いに直交する。

第3面〔図26・写真21〕 暗オリーブ灰色シルト層〔図9-⑩層（北壁断面では溝5があるためこの層はない）〕上面。トレンチ北部で深さ1.3m以上の溝5を検出。土坑1は長径100cm、短径65cm、深さ20cm。埋土はいずれも上層の細砂〔図9-⑪層〕。面の高さはT.P.+6.2~6.3m。

第4面 暗オリーブ灰色シルト層〔図9-⑩層(⑪層同様、図9には記載なし)〕上面。面の高さは、およそT.P.+6.1m。

第5面 暗灰色シルト混じり極細砂層〔図9-⑫層〕上面。面はほぼ平坦で、その高さはT.P.+4.1~4.2m。

第6面〔図27・写真22〕 黒色シルト層〔図9-⑬層〕上面。面の高さはT.P.+3.7~3.8mで、南西側が数cm低くなる。

#### 95-6 トレンチの出土遺物

第1面 陶器5片、瓦2片、歴史時代の土師器3片。

第1層 磁器〔図34-1・2〕5片、陶器10片、瓦器・瓦質土器5片、瓦5片(うち軒丸1点)、須恵器71片(うち古墳時代8片)、土師器15片(うち古墳時代1片)。

第1・2層 断面観察用アゼから陶器2片、瓦1片、古墳時代の須恵器〔図34-3〕1片。

第2層 歴史時代の須恵器1片、土師器12片(うち古墳時代2片)、弥生土器〔図34-4~6〕5片。

第4層 弥生土器34片(うち後期〔図34-7〕10片)。

第5層以下 出土遺物なし。

#### 95-6 トレンチの小結

検出遺構は、第2面で溝1~4、第3面で溝5と土坑1。他の面はほぼ平坦だが、第6面は南西側がわずかに低い。出土遺物総数177点。以上の遺構と遺物から、第1面は近代、第2面は古代~中世、第4面は弥生時代後期頃と推定される。

### 7 95-7 トレンチ

#### 95-7 トレンチの遺構面

第1面 機械掘削終了面。オリーブ褐色シルト層〔図10-①層〕上面。面の高さはT.P.+8.3~8.4m。

第2面〔写真23〕 きわめてよく搅拌されたいわゆる整地層と考えられるにぶい赤褐色粗砂~疊層〔図10-②層〕の上面。東側がT.P.+8.3m、西側がT.P.+8.0mと約30cmの比高があるが、とくに傾斜変換線は認められない。

第3面〔図28〕 厚さ4.5mにおよぶ洪水砂層〔図10-③層〕を除去した面。T.P.+3.8~3.9mのはば掘削限界の深さで、トレンチ北西側の大部分で黒色土の面を検出した。洪水砂の底面の可能性が大きい。

#### 95-7 トレンチの出土遺物

第1面 磁器1片、陶器7片、須恵器1片、土師器3片。

第1層 陶器1片、瓦3片、須恵器5片(うち古墳時代1片)、土師器11片、弥生土器または土師器24片(細片で判別困難)、弥生時代後期の土器2片、土錐1点。

第2層 陶器2片、古墳時代の須恵器2片、歴史時代の土師器2片、土師器または弥生土器8片(うち庄内式〔図35-1・2〕2片)、弥生土器〔図35-3~9〕410片(時期の判明するものは後期〔図35-3~5〕39片、前期〔図35-6〕14片だが、後期が主体を占める)、サヌカイト1点。

#### 95-7 トレンチの小結

検出遺構はない。出土遺物総数484点、とくに第2層の洪水砂層からは多くの土器が出土した。以上の遺物から、第1面は近代、第2面は古墳時代以降と推定される。

### III 土壤分析の予察

久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査トレンチの土層断面から採取した土壤について、化学分析調査を行っている。

土壤採取は95-5 および95-6 トレンチで行った。

95-5 トレンチでは図7～8に示すように分層された層位ごとに各1点（④の砂層については2点）サンプリングした。①・②層には陶磁器や歴史時代の須恵器及び土師器が含まれる。③層からは須恵器や土師器が出土し、④層以下には弥生土器などがみられた。

95-6 トレンチでは図9に掲げる⑩～⑫層をサンプリングした。これらの層からの出土遺物はないが、その上層から弥生土器が出土しているので、⑩～⑫層は弥生時代以前と推定できる。

化学分析には、原子吸光分析法を用いた。この原子吸光分析法とは、試料に高熱負荷を加えたり放電を起こして気化させ、被検元素を遊離原子状態にした後、熱あるいは電子衝突によって励起させる。この励起した原子がエネルギーを失う過程で放出する光のスペクトルを観察記録することによって、元素の同定を行う方法である。この分析方法を用いることにより、土壤中の微量元素マグネシウム (Mg)、カルシウム (Ca)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、コバルト (Co)、ニッケル (Ni)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn)、ストロンチウム (Sr)、カドミウム (Cd) の10元素について定量分析を行っている。

〔使用機器〕 フレーム原子吸光光度計 (AA-680型) 島津製作所製

〔分析条件〕 ホロカソードランプ使用条件は、

マグネシウムランプ (285.2nm、4 mA)	カルシウムランプ (422.7nm、6 mA)
マンガンランプ (279.5nm、5 mA)	鉄ランプ (248.3nm、8 mA)
コバルトルランプ (240.7nm、6 mA)	ニッケルランプ (232.6nm、4 mA)
銅ランプ (324.8nm、3 mA)	亜鉛ランプ (213.9nm、4 mA)
ストロンチウムランプ (460.7nm、4 mA)	カドミウムランプ (228.8nm、4 mA)

である。nmは、ランプの波長の単位であり、mAはランプの電流の単位である。

$$(1 \text{ nm} = 1 \text{ m} \mu = 10^{-9} \text{ m})$$

フレームの条件は、

燃料ガス (アセチレンガス 圧力0.9kg/cm<sup>2</sup>) 助燃ガス (空気 圧力3.5kg/cm<sup>2</sup>)  
である。

この分析の目的は、土壤中の微量元素の変遷過程を解明することにより、古環境の変化やその関連性を明らかにすることである。すなわち、遺跡地内の土壤の湿性状態の違いによって、植生や堆積腐食層のタイプが異なり、当然そこに生息する土壤生物も違ってくる。また、土壤生物の活動の仕方で土壤構造も違ってくるはずであり、それは土壤構造にも反映される。トレンチ内の局地地形に基づく土壤の平均的な湿润状態や土壤断面の構造の違いと微量元素の変化が、土壤断面に現れてくることを解明しつつある。この土壤の構造変化は、粘土鉱物の違いとかその他いろいろの因子も複雑に作用して生成されるので単純にはいえないが、土壤中の微量元素の量的変化や土壤断面の構造変化と相関関係があり、経時的変動量として解明できれば有意義な調査になると考えている。

現在鋭意分析中であり、その結果については、久宝寺遺跡の今後の報告書に掲載する。



図1 久宝寺遺跡・竜華地区の位置  
国土地理院 1:50000大阪東南部 (1995年) より

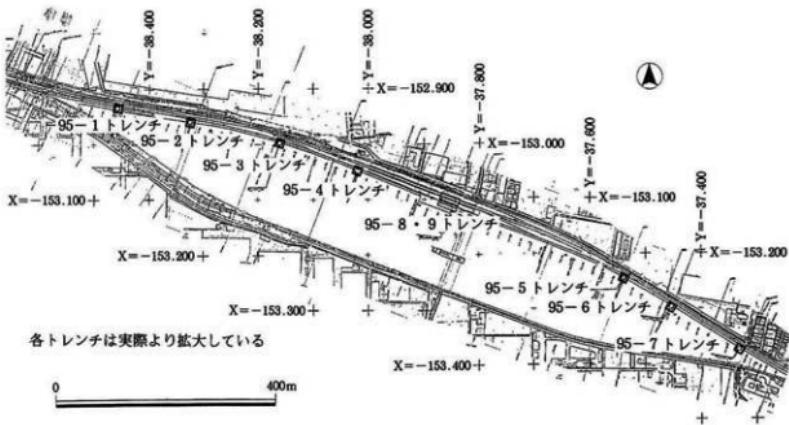
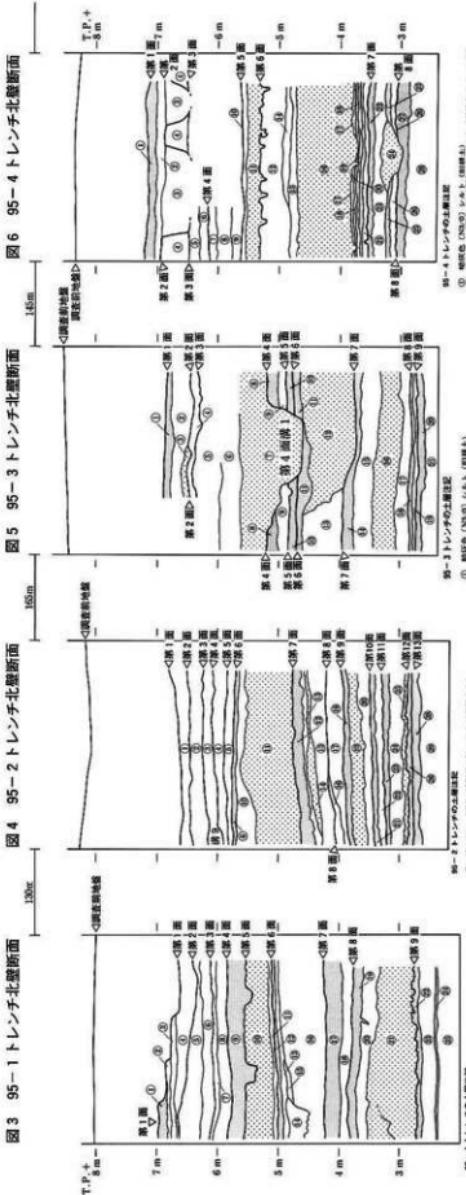


図2 トレンチ配置



第1回～第2回の主要登場人物	第3回～第4回の主要登場人物
① 桃太郎（おとたろう）：（主役）トトロの子供。元気で、好奇心旺盛。 ② 父親（とうちやく）：桃太郎の父。元氣な人間。 ③ 母親（ぼくちやく）：桃太郎の母。元氣な人間。 ④ 妹（めい）：桃太郎の妹。元氣な人間。 ⑤ 虫（むし）：桃太郎の虫。元氣な人間。	① トトロ（トトロ）：桃太郎の母。元氣な人間。 ② ハク（ハク）：白蛇。元氣な人間。 ③ ハクの娘（ハクのむすめ）：ハクの娘。元氣な人間。 ④ ハクの夫（ハクのうぶつ）：ハクの夫。元氣な人間。 ⑤ ハクの娘の夫（ハクのむすめのうぶつ）：ハクの娘の夫。元氣な人間。
⑥ 桃太郎の母の妹（おとたろうのういのいも）：桃太郎の母の妹。元氣な人間。 ⑦ 桃太郎の母の妹夫（おとたろうのういのいものかわい）：桃太郎の母の妹夫。元氣な人間。 ⑧ 桃太郎の母の妹夫の娘（おとたろうのういのいものむすめ）：桃太郎の母の妹夫の娘。元氣な人間。 ⑨ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫（おとたろうのういのいものむすめのうぶつ）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫。元氣な人間。	⑥ 桃太郎の母の妹（おとたろうのういのいも）：桃太郎の母の妹。元氣な人間。 ⑦ 桃太郎の母の妹夫（おとたろうのういのいもののかわい）：桃太郎の母の妹夫。元氣な人間。 ⑧ 桃太郎の母の妹夫の娘（おとたろうのういのいものむすめ）：桃太郎の母の妹夫の娘。元氣な人間。 ⑨ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫（おとたろうのういのいものむすめのうぶつ）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫。元氣な人間。
⑩ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめ）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘。元氣な人間。 ⑪ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめのかわい）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫。元氣な人間。	⑩ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめ）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘。元氣な人間。 ⑪ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめのかわい）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫。元氣な人間。
⑫ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫の娘（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめのむすめ）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫の娘。元氣な人間。 ⑬ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫の娘の夫（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめのむすめのかわい）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫の娘の夫。元氣な人間。	⑫ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめ）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘。元氣な人間。 ⑬ 桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫（おとたろうのういのいものむすめのうぶつのむすめのかわい）：桃太郎の母の妹夫の娘の夫の娘の夫。元氣な人間。

（アーティスト）：アーティストの名前を記入する。アーティストが複数いる場合は、各アーティストの名前を改めて記入する。

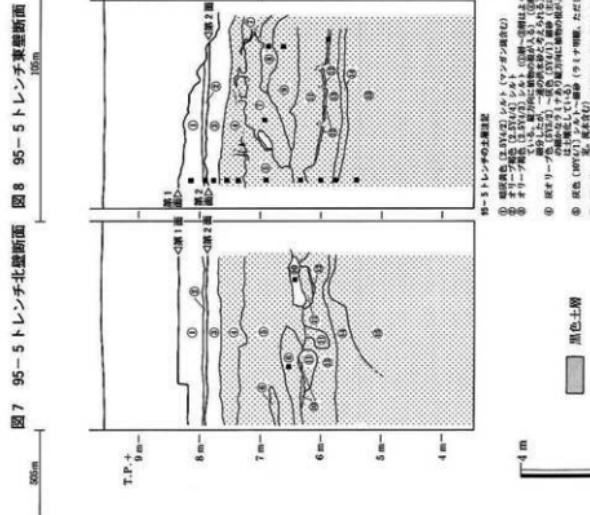
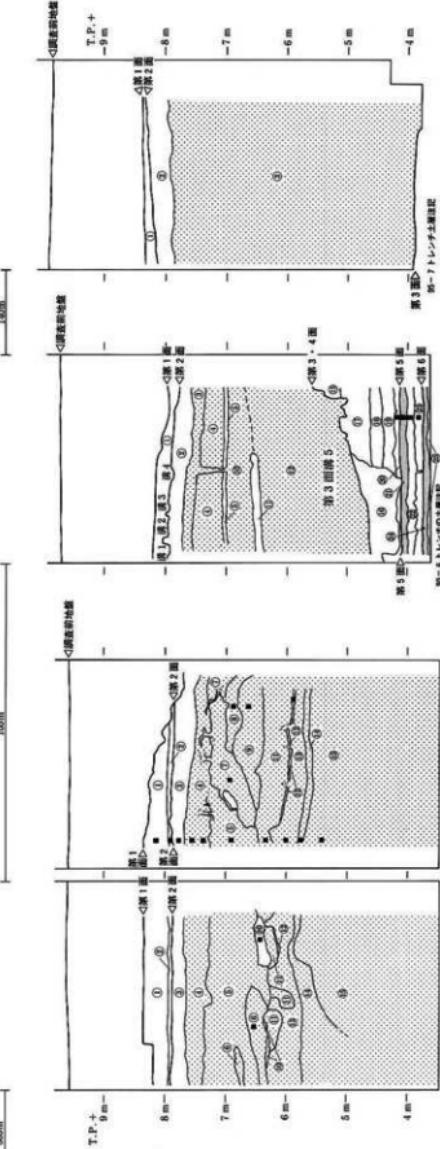


図7 95-5トランチ北壁断面 図8 95-5トランチ東壁断面

圖9-95-7 小、中、大三種面  
糊非牛、牛、非牛糊面



卷之二十一

図7 95-5トランチ北壁断面 図8 95-5トランチ東壁断面

原色シルト (原色土か、原色シルトの1  
色が異なる) はわめてよく見受けられて  
いる。

三

(左) 横断面(右) 立面(左) 横断面(右) 立面  
一端の底板が斜面をなす。水平方向の  
荷重を受けたときの变形量を計算し、

（アーヴィング）レバ  
（ラングレン）おお、大変な事にならうとして、  
（アーヴィング）レバ  
（ラングレン）おお、大変な事にならうとして、

◎ ◎ ◎ ◎

土庫記

55-5 レンチ

11

（この方のウナアカリ）  
（日本ではまだほんとうに見つかりません）

ただしお向は不  
満な表現。①野  
球（公平ないし野

第1回 読書の世界

④ 水色 (107)  
⑤ 緑オリーブ  
⑥ 緑オリーブ  
⑦ 緑オリーブ

黑色土網  
砂網

（腰の上半には横オーリーフ、下半には小プローチがある）

アラモードをつくむ。①

（前略）  
也（は）SOYU(1) シキト（開業）  
が不満とするが、ラーテアリ  
（は）SOYU(1) 細胞へ置く（う  
ちに細胞が、葉酸のどのくに  
もSOYU(1) シキト（結晶）

⑨ 繰り返し

2万件のデータを用意。百子の「原きく」への取扱いは、解説書に「解説書」として記載され、解説書に「解説書」として記載される。

例	意味
森 (MORI)	森林へ、樹林 (Mori)
	森林を食む (Mori o shoku)
リーフ原生林 (LEAFY FOREST)	樹木 (mori no mori)
	樹木 (mori no mori) レベル
リーフ原生林 (LEAFY FOREST)	樹木 (mori no mori) が初めて多くなる
	リーフ原生林 (LEAFY FOREST)
	リーフ原生林 (LEAFY FOREST) が

66

1) 異なる種類の物質を用いて、その性質を比較する。

68

4 m

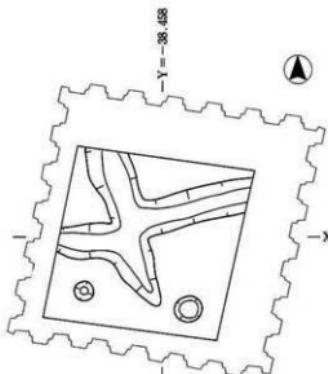


図11 95-1 トレンチ第5面

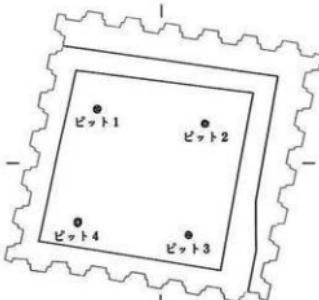


図12 95-1 トレンチ第6面

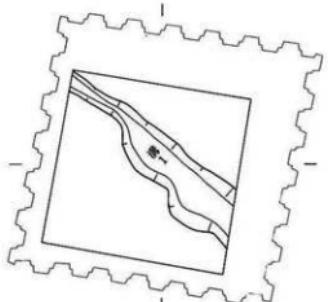


図13 95-1 トレンチ第7面

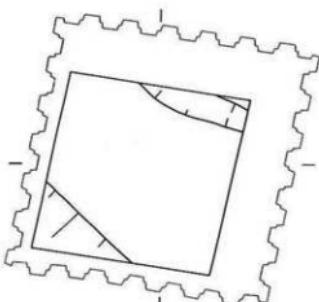


図14 95-1 トレンチ第9面

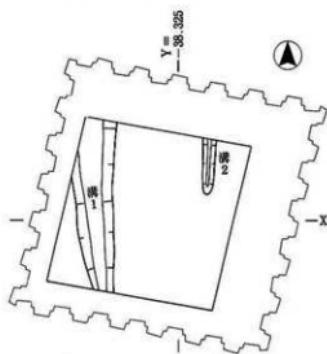


図15 95-2 トレンチ第3面

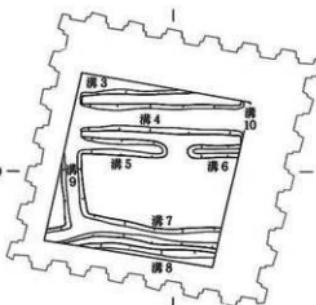


図16 95-2 トレンチ第4面

0 5 m

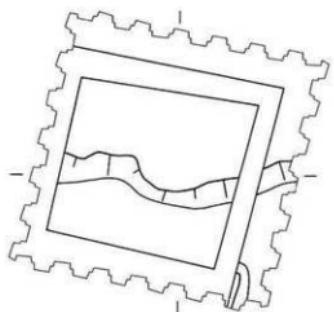


図17 95-2 トレンチ第7面

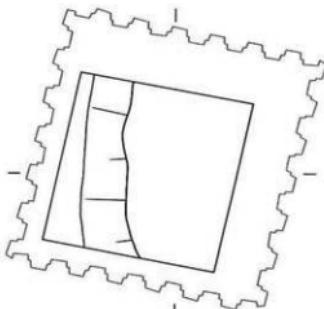


図18 95-2 トレンチ第9面



図19 95-3 トレンチ第3面

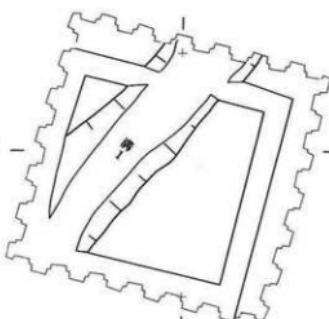


図20 95-3 トレンチ第4面

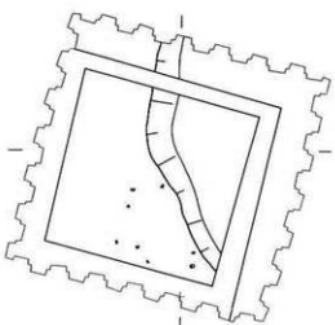


図21 95-3 トレンチ第7面

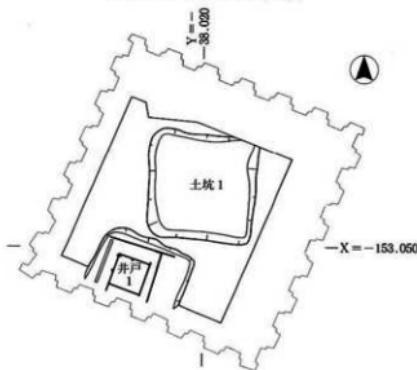


図22 95-4 トレンチ第2面

0 5 m

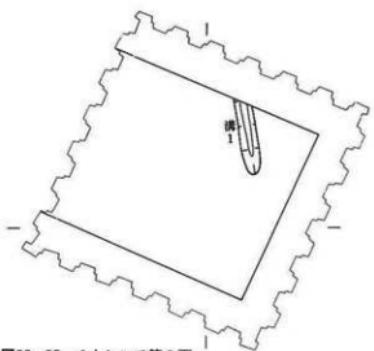


図23 95-4 トレンチ第8面

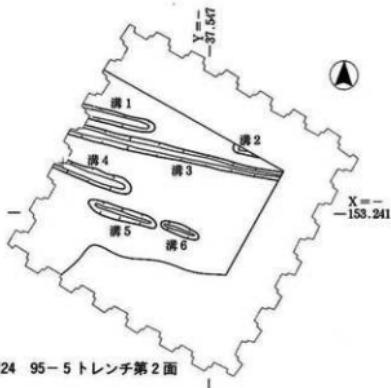


図24 95-5 トレンチ第2面

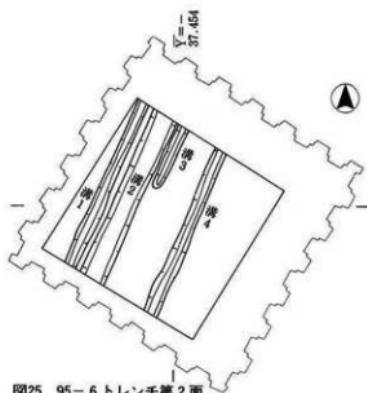


図25 95-6 トレンチ第2面

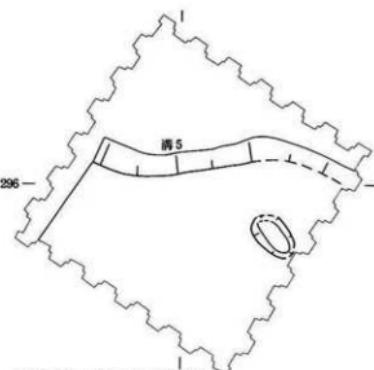


図26 95-6 トレンチ第3面

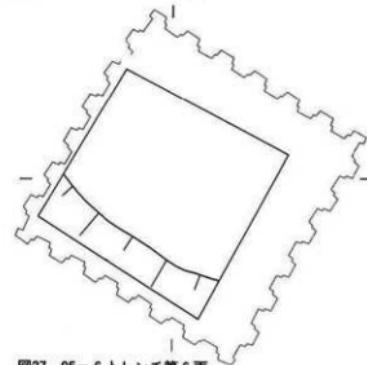


図27 95-6 トレンチ第6面

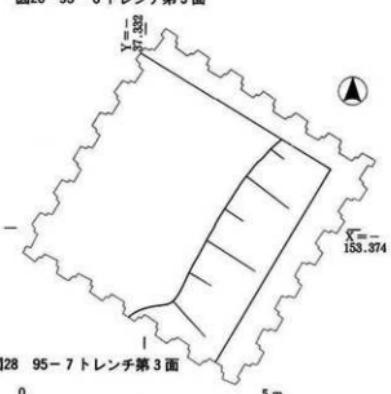


図28 95-7 トレンチ第3面

0 5 m

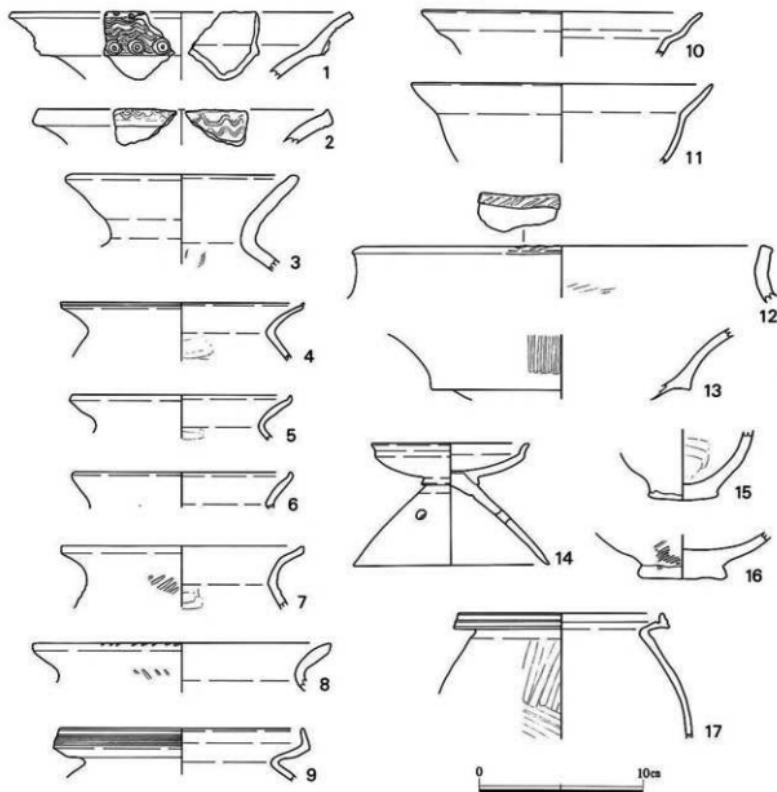


図29 95-1 トレンチ出土遺物

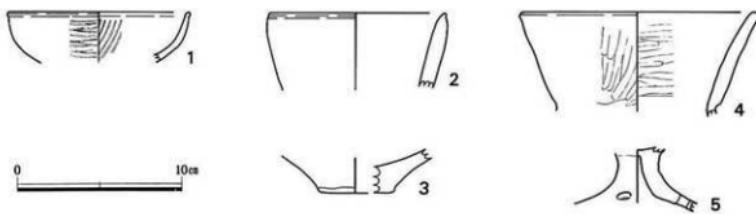
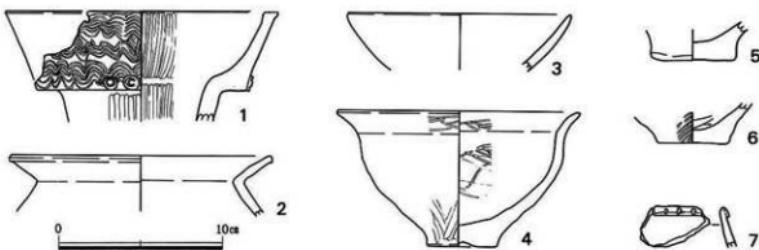
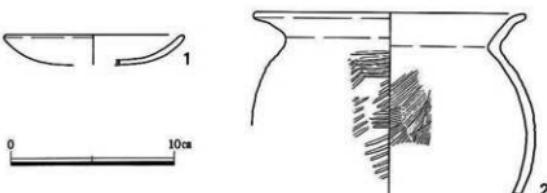


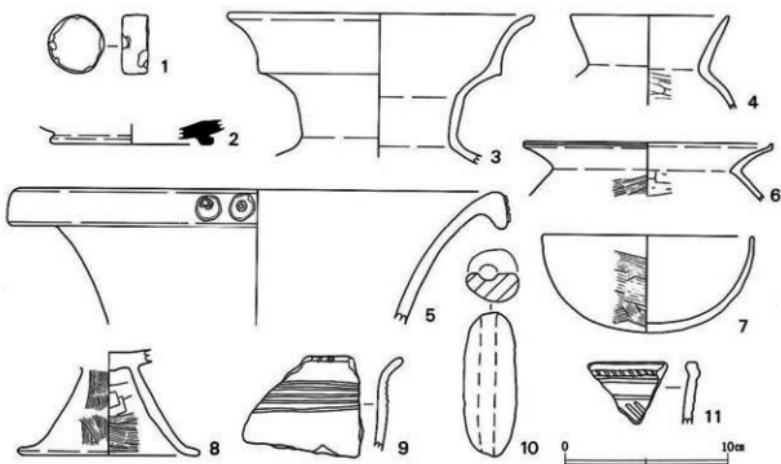
図30 95-2 トレンチ出土遺物



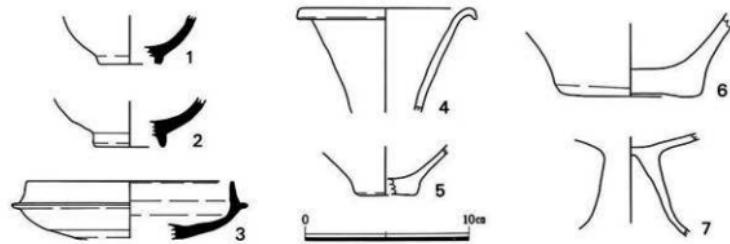
遺物出土層位 1～7：第3層  
図31 95-3 トレンチ出土遺物



遺物出土層位 1：第2層 2：第4層  
図32 95-4 トレンチ出土遺物

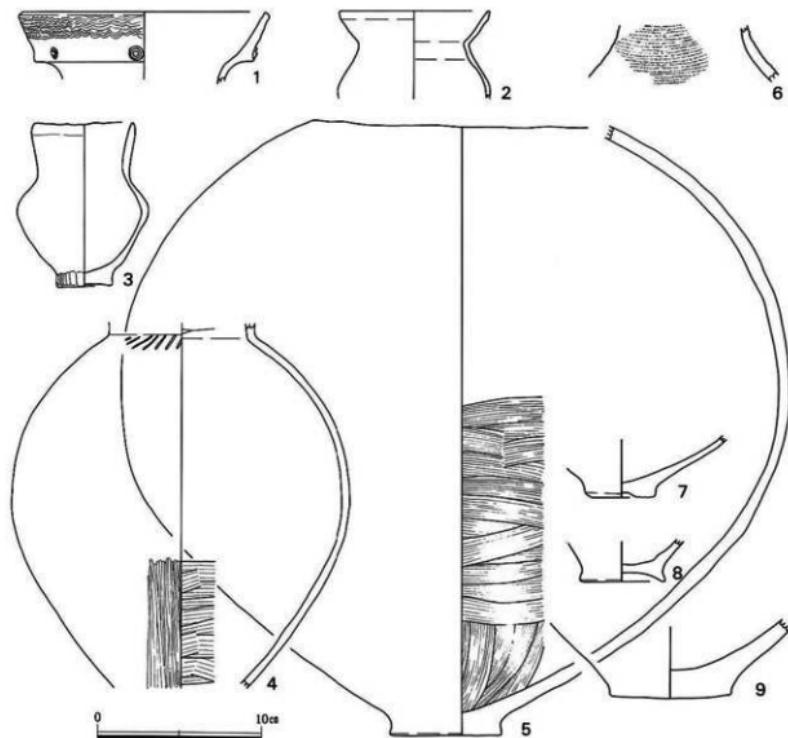


遺物出土層位 1：第1層 2：第2層（シルト層）3～11：第2層（砂層）  
図33 95-5 トレンチ出土遺物



遺物出土層位 1・2 : 第1層 3 : 第1～第2層 4～6 : 第2層 7 : 第4層

図34 95-6 トレンチ出土遺物



遺物出土層位 1～9 : 第2層

図35 95-7 トレンチ出土遺物



写真1 久宝寺遺跡・竜華地区全景（上空東から）



写真2 久宝寺遺跡・竜華地区（西から）

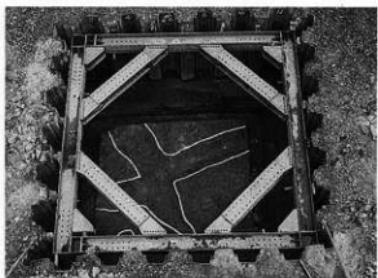


写真3 95-1 トレンチ第5面（南から）

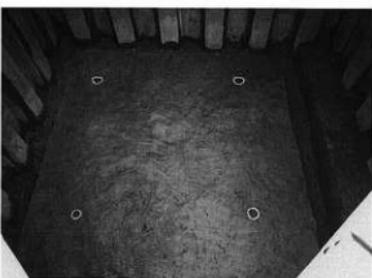


写真4 95-1 トレンチ第6面（東から）



写真5 95-1 トレンチ第7面（北から）

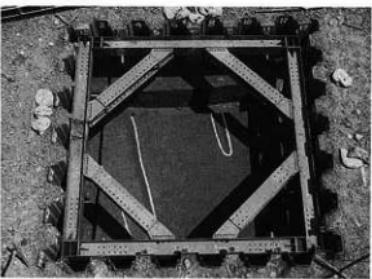


写真6 95-2 トレンチ第3面（南から）

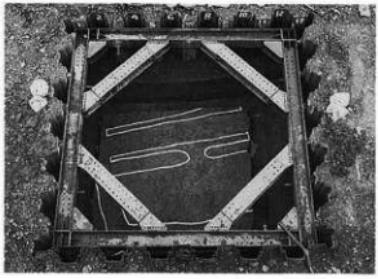


写真7 95-2 トレンチ第4面（南から）

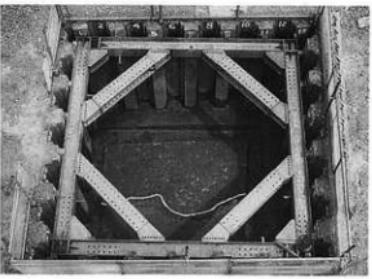


写真8 95-2 トレンチ第7面（南から）

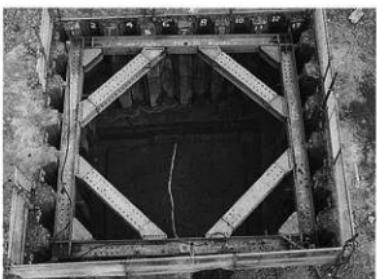


写真9 95-2 トレンチ第8面（南から）



写真10 95-2 トレンチ第9面（南から）

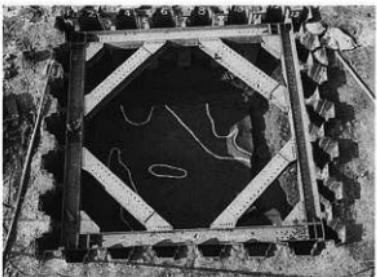


写真11 95-3 トレンチ第3面（南から）

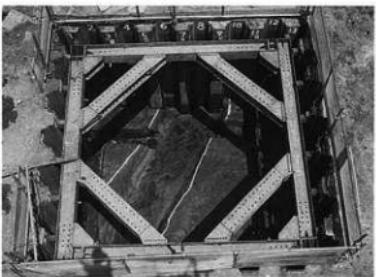


写真12 95-3 トレンチ第4面（南から）

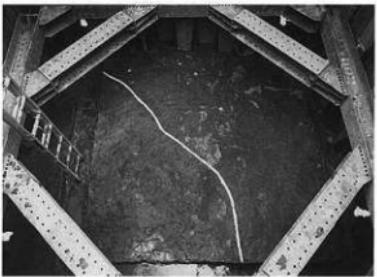


写真13 95-3 トレンチ第7面（北から）



写真14 95-3 トレンチ第7面偶跡類足跡（東から）

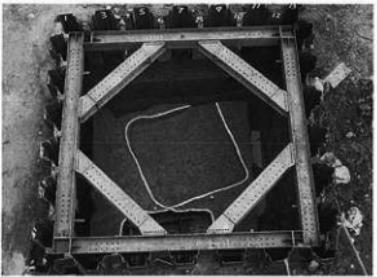


写真15 95-4 トレンチ第2面（南から）



写真16 95-4 トレンチ第2面井戸1（北から）



写真17 95-4 トレンチ第8面（北から）

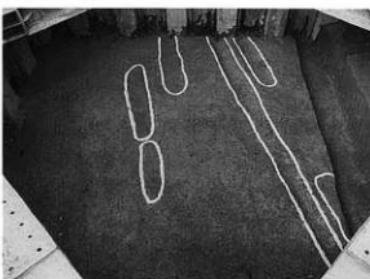


写真18 95-5 トレンチ第2面（東から）



写真19 95-6 トレンチ東壁断面の噴砂（西から）

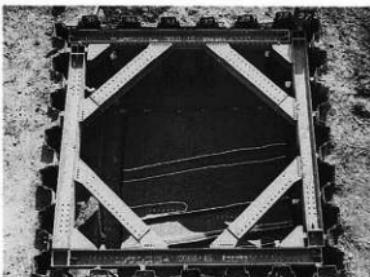


写真20 95-6 トレンチ第2面（西から）



写真21 95-6 トレンチ第3面（東から）

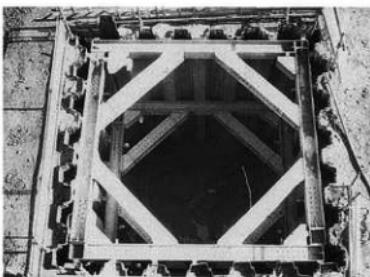


写真22 95-6 トレンチ第6面（西から）

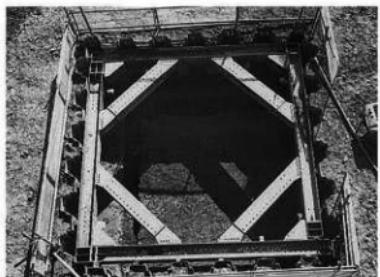


写真23 95-7 トレンチ第2面（西から）



写真24 95-7 トレンチ第2層土器出土状況（南から）

## 報告書抄録

ふりがな	きゅうほうじいせき・りゅうけちく しくつちょうさほうこくしょ
書名	久宝寺遺跡・竜華地区 試掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	木間元樹・山口誠治
編集機関	財團法人 大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536 大阪府大阪市城東区瀬生2丁目11-3 小森ビル4階 ☎06-934-6651
発行年月日	1996年3月30日

所収遺跡	所在地	コード		経度・緯度	国土座標 第VI系	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
久宝寺遺跡 ・竜華地区	大阪府八尾市龜井 ・浜川	27212		北緯 34° 34' 37" 東經 135° 35' 00"	X=-152.931 ~-153.377 Y=-37.328 ~-38.461	1995年5月 から 1995年12月 まで	189m <sup>2</sup>	再開発に 伴う試掘	
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項			
久宝寺遺跡 ・竜華地区	弥生時代	溝	弥生土器		ピットは掘立柱建物の一部か 条里地割りに沿った溝群				
	弥生時代～古墳時代	ピット	弥生土器 土器						
	古代～近世	溝	土器						
	近世以降	溝 井戸 土坑	陶磁器 瓦						

### 久宝寺遺跡・竜華地区 試掘調査報告書

発行所 財團法人 大阪府文化財調査研究センター  
 〒536 大阪府大阪市城東区瀬生2丁目11-3  
 ☎06-934-6651  
 印刷 中島弘文堂印刷所  
 発行日 平成8(1996)年3月30日